



British Trad Review

No.1

このたび、ブリティッシュ・トラッドを愛する人々の連帯を深めるために、「ブリティッシュ・トラッド・愛好会」を作りました。その活動の一つとしてこの機関紙、「OAK - British Trad Review」を、ここに創刊致します。1977年8月。

NEWS

•セブテンパー・プロダクションのソロデューサーとしてこれ迄スティールアイ・スパン、シャーリー・コリンズ、イアン・マシューズ、デカメロン等の多くのアルバムを手掛けてきた、サンデイ・ロバートンが、自身のレーベル、ロックパーロウ・レコード (Rockburgh Records) を設立した。まずはアラン・テイラーの "American Album" や、ケイ & テリー・ウッズによる "The Woods Band" 等を再発するが、オランダのインストゥルメンタル・バンド、フィンチ (Finch) とも契約を結んでいるので、そのアルバムが今年暮にはリリースされる予定である。

•トレイラー・レーベルのビル・リーダーは、ブリティッシュ・フォーク界の著名なギタリストのプレイを集めたギター・アルバムを今秋リリースする計画を持っている。フィーチャーされるのはマーティン・カーシー、ニック・ジョーンズ、マイク・チャップマン、ジョン・レンバーン、ゴードン・ギルトラップ、アーサー・フィッシュャー et al. レコーディングは既に完了しているようだ。

•フォーク・シンガーのデイブ・ゴウルダー (Dave Goulder) の家が全焼、彼は保険をかけていなかったので全財産を失った。彼は1973年に "Requiem For Steam" というアルバムを発表している他、そのペンになる "The January Man" はマーティン・カーシーを始めとする多くのシンガーに唱われている。現在彼の所にはスコットランド、イングランドのフォーク界の多くの人達から義援金が送られてきているが、近くベネフィット・コンサートも行なわれる予定。

•ウォータースンズのマイク・ウォータースンのソロアルバム "Mike Waterson" とラル & ノーマ・ウォータースンによる "A True Hearted Girl" の2枚のアルバムが9月にトピックからリリースされる。

•他にトピックの新譜情報をお伝えすると - ジョン・カークパトリック & スー・ハリスがこの冬の発売に向けて新アルバムのレコーディングを完了、現在ミキシングの段階にある。アイルランドのアコーディオニスト、ジャッキー・デリリー (Jackie Daly) のソロ・アルバムも発売が予定されている他、昨年多くの新しいトラッド・ファンを生んだジューン・テイパーのセカンド・ソロ・アルバムが早ければ10月にリリースされるようである。(今から楽しみですね。)

・多くのフォーク・フェスティバルに出演して精力的な活動を行っているアルビオン・ダンス・バンドは、アメリカからプロデューサーにジョー・ポイドを迎えてセカンド・アルバムをレコーディング中である。このレコードからサキリフォニストのピート・パロックと、現リフト・マシンのリック・サンダース(アイドル)が、正式にメンバーとして加入する模様。

・同じくアルビオンの近況。彼等はフォーク関係のステージだけでなく、中世の劇の音楽も手がけている。最近ナショナル・シアターで行なわれたキリストの生涯を主題とした中世の劇の上演に際し、アルビオン・ダンス・バンドは何曲かの中世の曲を伴奏として演奏した。なおこの劇の上演方法は少々変わっていて、椅子を取り払った劇場のフロア上で、回りを観客に取り囲まれる様な形で上演されたということである。

・元リンディスファーンのメンバー、アラン・ハルが新グループ「ラディエーター」(Radiator)を結成した。メンバーは、アラン・ハル、同じく元リンディスファーンのレイ・レイドロウ、ケニー・クラドック、元スナフのコリン・ギアスン、元アラリアライス・セットのピート・カートリーの5人で、その音楽性が注目される。

・ロンドンにFREE REED Recordsの支店ができた。FREE REEDはコンセルティーナ、メロディオン等のフォーク楽器、及びフォーク・レコードを直接及び通信販売する会社。(くわしくは「Coast to Coast」No.4を参照して下さい。)今まではDerbyの本社しかなく、日本からの旅行者には利用しにくかった。これでロンドンには「Collets Folk Shop」、「Dobells Folk Shop」、「E.F.D.S.S. Folk Shop」と共にフォーク・レコード専門店が4つになった。なおこの店の所在地、Camden Townは、E.F.D.S.S.のすぐ近く。

at a new shop

Free Reed Records

London

Folk Records & Instruments

13 Chalk Farm Rd.

Camden Town

Melodeons, Concertinas & more

Open Wed. to Sun. 11 to 6.30

・クリックレイドに於ける身1回イングリッシュ・カントリー・ミュージック・ウィークエンドには、ステイールアイ・スパンのリハーサルを中断して駆けつけたマーティン・カーシガ、ジョン・カークパトリック等と「Plain Capers」ライブ版をやったのけて、大成功を収めた。この模様はニール・ウェインによって録音されたので今年のもあたり、レコードで聴けるかもしれない。(下の写真はステイライ'77)

STEELEYE NOW, 1977 LINE-UP: RICK KEMP, TIM HART, JOHN KIRKPATRICK, NIGEL PEGRUM, MARTIN CARTHÉ, MADDY PRIOR



OLD ALBUMS

RAY FISHER "Bonny Birdy" (Trailer LER 2038)

有名なフィッシャー・ファミリーの一人 "Ray Fisher" の 1972 年製作になる、現在まで唯一のソロ・アルバムです。

この生粋のスコッツである彼女のアルバムに集まった豪華なミュージシャンの顔ぶれは、長い間筆者の頭を悩ましてきました。と言うのも、クレジットを見て分かる様に、そのミュージシャン達は Bobby Campbell を除いて全員がイングリッシュであり、しかも同じイングリッシュでも、Steeleye II の 4 人という南方系の人々と、Colin Ross, Alister Anderson の 2 人の High Level Ranter 達、そして、ノーサンバランドの有名な Mandolin, Cittern 製作者である、Stephan Sobell とその夫人、Liz、という、北方系の人々が同じアルバムに集まっているのです。一体この不思議な組み合わせは何故なのか。唯一の手がかりは Colin Ross が Ashley Hutchings のプロデュースした Shirley Collins の "No Roses" で Northumbrian Small Pipe を演奏していたという事ぐらいですが、それとスコッツである Ray Fisher のアルバムに、この様に大勢のイングリッシュが集まったという事の謎を解くものではありませんでした。

しかし、長年筆者を悩まして来たこの謎も、今春イギリスを旅行した際、ノーサンバランドに Colin Ross を訪ねた時、すべてが明らかになりました。何と、Colin Ross と Ray Fisher は夫婦だったのです。

スコットランド北面の島、スカイ島の出身であるという生粋のスコッツの Ray は Colin Ross と結婚すると共に、ボーダーを越えて彼の生まれ育ったノーサンバランドへ移り住み、現在はそこに中学生に成長した 2 人の子供達と一緒に幸福な家庭を築いているのです。

Ray の夫の Colin Ross は非常に視野の広い人物で、自身は High Level Ranters の一員として、又 Northumbrian Small Bagpipe の卓越した演奏者と同時に製作者としても、North-East の音楽を専門としていますが、(彼は Northumbrian Small Pipers Society の Chairman でもあり、又 Newcastle にある Bagpipe Museum の館長もしています。) その様な立場を離れれば、広くブリテン島全体のトラディショナル・ミュージックを愛し、沢山のフォーク・シンガー達と広い交流があるそうです。Ashley Hutchings の一連のプロジェクトに対しても非常に評価していて、何か手伝いたいと考えていたとの事で、その一つの現われが、"No Roses" の Albion County Band A の参加だという事です。

その様な事から、このアルバムの顔ぶれは Ray と Colin の関係、そして 2 人の広い交遊関係から理解できる訳で、筆者の長年の疑問も、さかり解けたのです。

さて多くのイングリッシュが参加して出来たこのアルバムですが、その内容は紛れもなくスコットランドのもので、彼女の兄の Archie Fisher や、つい先頃夫の Artie Trezise と共にデュエットでデビューした妹の Cilla Fisher のアルバムと同じく、スコットランド民謡の味わいを十分に堪能できるもので、フィッシャー・ファミリーのアルバムならではと言えるものです。

取り上げられたバラッドやソングも、又 Ray のシンギングも生粋のスコッツならではというものです。特に "Mill o' Tifty's Annie" ("Andrew Lammie" とか "Trumpeter of Fivie" というタイトルでも知られています。) や彼女のフェイバリット・バラッドである "The Great Silkie of Sul Skerry" をしてタイトル・チューンの "Bonny Birdy" ("Matty Groves" と同じテーマを持つバラッド。) などはスコティッシュ・バラッドの真髓ともいうべきもので、彼女のシンギングもそれに相應しく、バラッド・シンガーとしての Ray Fisher の素晴らしさを余すところなく伝えていきます。中でも "Bonny Birdy" をハイランド・ダンス・チューンである "Devil in the Kitchin" という Strathspey のメロディに乗せて歌ってしまうのは圧差で、彼女が生粋のスコッツであることを強く感じさせるものです。

もう一つ、彼女が生粋のスコッツであるという事を感じさせるのは、そのスコットランド方言の歌詩と発音です。普通の英語とはかなり違うので、なかなか理解しにくいかもしれませんが、(日本でも地方の方言はなかなか分かりにくいのと同じで、イギリス人イングリッシュにとってもスコッツ・シンガーの歌はなかなか聴き取れないそうです。) やはり、バラッドはその詩が分かってこそ本当の良さが分かるので、できたらそこまで鑑賞してほしいと思います。

そこで、バラッド・シリーズ No.1 としては、東野和子さんに "Mill o' Tifty's Annie" を取り上げてもらったので、どうぞ御鑑賞を。又、このバラッドは、Dick Gaughan の入っている、Boys of the Lough の 1st アルバム (Trailer LER 2086) に "Andrew Lammie" のタイトルで収められているので、Ray Fisher に対するスコッツ・シンガーの雄、Dick Gaughan の歌いぶりも同時に聴き比べると興味深いと思います。なお "The Great Silkie of Sul Skerry" は東野さんの書いたバラッド集 "BALLAD" に収められているので、お持ちの方はそれを参照して下さい。お持ちでなくても、もし参考になりたいという方がありましたら、どうぞ御連絡下さい。その部分のコピーを送ります。

(森 能文)

BALLADS

"Mill o'Tifty's Annie" (Andrew Lammie)

from the singing of Ray Fisher
in her Album "Bonny Birdy"

"水車小屋ティフティーのアニー" (アンドルー・ラミー)

- 1 At Mill o'Tifty lived a man
In neighbourhood of Fyvie;
And he had a lovely daughter fair
Was called bonnie Annie.
 - 2 Lord Fyvie had a trumpeter
Whose name was Andrew Lammie;
And he had the art tae gain the heart
O'Mill o'Tifty's Annie.
 - 3 Lord Fyvie he rade by the door
Whar lived Tifty's Annie;
And his trumpeter rode him before
Even this same Andrew Lammie.
 - 4 Her mither called her to the door
Sayin' "Come here tae me, my Annie;
Did eer you see a bonnier lad
Than the trumpeter of Fyvie?"
 - 5 Naething she said, but sighing sore
Alas for bonnie Annie!
She durst not own her heart was won
By the trumpeter o'Fyvie.
 - 6 At nicht when all lay in thir bed
All slept at soon but Annie;
Love so opprest her tender breast
Thinking on Andrew Lammie.
 - 7 "O love comes in at my bed-side,
And love lies doon beside me;
Love so possess my tender breast
And love will waste my body."
 - 8 "For the first time me and my love met
T'was in the woods of Fyvie;
Wi' kisses sweet he sis me greet
And called me his bonnie Annie."
1. ファイビーの近くの水車小屋ティフティーに
一人の男が住んでいた
ボニー・アニーと呼ばれる *ス。「美しい」という意
愛らしく、美しい娘があった
 2. ファイビーの領主はら。ば傘を持っていた
名をアンドルー・ラミーといった
彼は水車小屋ティフティーのアニーの
愛を得る術を知っていた
 3. ティフティーのアニーの住む小屋の戸口に
ファイビーの領主が馬に乗ってやって来た
ら。ば傘はその前に馬を走らせた
それはあの、アンドルー・ラミーだった
 4. 母はアニーを戸口に呼んで言った
「アニーや、ここに来てごらん、
ファイビーのら。ば傘よりも美しい男を
見たことがあるかい。」と
 5. アニーは何も言わずに悲しみのため息をついた
ああ、可哀そうなボニー・アニーよ！
ファイビーのら。ば傘が彼女の心を奪ったと
アニーは打ち明けることができない
 6. 夜、家中みな寝床に入り。
アニーを残してすぐに寝入った
アンドルー・ラミーを思うと
愛はアニーの優しい胸をしめつけた
 7. 「愛は私のまくらもとに来て
私のかたわらに横になり
私の優しい胸に取りついて
私の体をやつれさせるだろう」
 8. 「私とあの人が最初に会ったのは
ファイビーの森の中だった
あの人は私に優しいキスを浴びせ
『私のボニー・アニー』と呼んだ」



- 9 "But the last time me and my love met
Says he, 'My bonnie Annie,
It's I wanna gang tae Edinburgh toun
But I'll soon went back tae Fyvie.'" 9. 「私とあの人が最後に会った時
あの人は言った『私のボニー・アニー、
私はエジンバラに行かねばならない、でも
すぐに、ファイビーに戻って来るよ』と」
- 10 But word it's soon has gotten doon
That the trumpeter o' Fyvie
Has had the art tae gain the heart
O' Mill o' Tifty's Annie. 10. しかし、ファイビーのちっぽちが
水車小屋ティフティーのアニーの
愛を得たという、うわさは
たちまち広まった
- 11 So Tifty's wrote a letter braid
And sent it up tae Fyvie;
Tae say his daughter was bewitched
By his servant Andrew Lammie 11. そこでティフティーは長い手紙を書き
ファイビーの領主に送った
領主の召使、アンドルー・ラミーが
娘に魔法をかけた、と
- 12 So Fyvie rade straight tae the mill
Sayin' "What ails ye bonnie Annie?"
"O it's all for love that I maun die
Aye it's all for Andrew Lammie." 12. ファイビーの領主はすぐと水車小屋に馬を走らせた
「ボニー・アニーよ、何を嘆いているのだ」
「ああ、愛のため、アンドルー・ラミーのため
そのために私は死ぬのです」
- 13 "O Tifty, Tifty, gie consent
And let your daughter marry
It will be tae ain o' a higher degree
Than the trumpeter o' Fyvie." 13. 「おお、ティフティーよ、ティフティーよ、承諾しなさい
そして娘をファイビーのちっぽちよりも
身分の高い者と
結婚させるのだ」
- 14 "Had she been born o' richer kin
As she is rich in beauty,
I wad tae taen the lass mysel
And make her my ain true lady." 14. 「彼女がその美しさに惚まれているように
高い身分の生まれであつたら
私は自分でその娘と結婚して
彼女を領主夫人にするだろうに」
- 15 "O Fyvie's lands they're far and wide
And they are wondrous bonnie;
But I wadna leave my ain true-love
Nor for all your lands o' Fyvie." 15. 「ファイビーの領地はとてま広く、そして、
世にもまれに美しい土地です
でも私は、あなたのファイビーの領地に引き換えても、
私の恋人とは別れません」
- 16 At this her feyther struck her sore
As likewise did her mother;
And her sisters all they did her scorn
Bur wae be tae her brother! 16. それを聞くと、父はアニーをひどく打った
母も同じ仕打ちをした
姉たちもみな、アニーをひどく叱った、
しかし、災いよ、兄にあれ！

17 For her brither struck her wondrous sore
 Wi' cruel strokes and mony;
 He broke her back against the high
 All for loving Andrew Lammie. /halldoor

18 "O Fyther, Mither, sisters all,
 Why so cruel tae your Annie?
 My heart was broken first by love,
Noo my brither's broken my body."

19 "O Mither, Mither, mak my bed
 And turn my face tae Fyvie
 That I may lie and thus may die
 For the trumpeter o' Fyvie."

17. なぜなら兄はアニーをひどく強く打った
 無慈悲に何度も打った
 アンドルー・ラミーを愛したために
 アニーの背中を広間の高戸に打ちつけて折った

18. 「ああ、父さん、母さん、姉たちよ、なぜ、
 あなたのアニーにこんなにもごいことをするのですか
 最初に愛が私の心を破り
 今度は兄さんが私の体をこわしました」

19. 「ああ、母さん、母さん、寝床を作って下さい
 そして私の体をファイビーに向けて下さい
 そうして横たわり、そのまま死ぬるように。
 ファイビーのらっぱ手のために」



GLOSSARY

tae-to	maun-must
rade-rode	gie-give
whar-where	ain-own
mither-mother	kin-kind
naething-nothing	wad-wed
durst-dare	taen-taken
eer-ever	mysel-myself
nicht-night	fayther-father
doon-down	wae-woe
gang-go	mony-many,
toun-town	noo-now
braid-broad	mak-make
ye-you	

《解説》

北スコットランドで古くから非常に愛されているバラッドです。実在の人物、実話を元にして、17世紀中葉に劇の伴歌として歌われ、19世紀初頭に老人の暗誦により、ポーター・バラッドとして書き留められました。実際はこの2~3倍の長連を持つバラッドですが、レイは随所をアタプトしたり、変詩して歌っています。数多くみられる「愛に死す」をテーマにした日常家庭的バラッドと目されがちですが、「妹いじめ」、あるいは「超自然」（レイが取り上げていない詩連のうち、2~3ヶ所、超自然を歌ったものがあります。）あるいは、有名なバラッド「ルーシー・ワン」に見られるような「兄妹の恋愛関係」（ここでは、兄の死の折檻で暗示されている。）などが頭がのぞかせています。フアリはレイのシンギングに従いました。

（東野 和子）



NEW ALBUMS

NIC JONES "Noah's Ark trap"

トラディショナル・フォークの、レコードという複製商品を介しての聴かれ方に於いては、共同体内部で自然発生的に生じ継承されていった様な側面はもちろん無く(こうしたフォークの在り方は産業革命以後、英国では殆ど消滅した。)、フォーク・クラブで存在する歌い手と聴き手の両者に共有されたトラディショナル・フォーク蘇生の場といったものをさえない。したがって、歌い手側が単にアカデミックな意味でのトラディショナル・フォークの採集・保存以上の事を行なおうとするならば— 言い換えれば限られた立場にある人だけでなく広い聴き手の層を視野に入れるならば、レコード産業と共に発展してきた今日のポピュラー音楽から新しい手法を学びとらねばならない。即ちトラッドの歌い手といえども、パンヤミンの言うところの「一般的に言い表わせれば、複製技術は、複製の対象を伝統の領域から引き離してしまうのである。複製技術は、これまでの一回限りの作品を大量に出現させるし、こうしてつくられた複製品をそれぞれ特殊な状況のもとにある受け手の方に近づけることによって、一種のアクチュアリティを生み出している。」という現状を認識しなければならぬ訳だ。

そしてこの新しい手法を学ぶ過程には、常に通俗化・ポップ化の危険性が潜むものの、トラディショナル・

フォークが狭量な伝統擁護・保守主義を越えて音楽的に高められる道も又、ここ(広い聴衆層を射程に入れての、新しい手法の展開)にある筈だ。かつてのフェアポート・コンベンション等による電気楽器の導入は確かに革新的な試みであったが、しかし、電気楽器の使用を通じて学び取られた、従来の価値感に囚われない新しいトラッドへの視座こそが重要だったのである。

こうした観点から見て、ニック・ジョーンズのこの新作は重要であり、示唆的である。まず、リズム面を強化する様々な試み— それもリズムを顕在化させたギターやダルシマーを多重録音で重ね合わせてパラッドのバックに用いたり、“Jackie Tar”でのフィドル・ハーモニウムに絡めたトライアングルの斬新的な使用等、複数のパートにリズムを際立たせつつ導入される音空間の多重構造化である。そして、各曲を間断なく繋いで一つの曲から他の曲へ緊張感を持続させ、漸次効果を高めていく試みも注目される。

彼自身のヴォーカルも5年間のレコーディング・ブランクの間のフォーク・クラブでの地味な音楽活動によって熟成し、穏やかでふっ切れたものになっているが、何よりも、このアルバムが今後のトラッドの進むべき方向を示しているという点を強調したい。

(遠藤 斗志也)

FAIRPORT CONVENTION "Bonny Bunch of Roses"

およそ英国のトラッドを愛する人間にとり、フェアポート・コンベンションとは、避けて通ることのできなかつた存在だろうと思います。そして又、このロックの世の中で、現代の語法に基いてトラッドに執着することの困難を、良きにつけ悪きにつけ我々に示したのも、このバンドでした。ただ、彼等の足跡に注目してきた者であればある程、この3、4年の彼等に失望を感じていたのも事実だったでしょう。

しかし彼等のこの13作目、“Bonny Bunch of Roses”のラインアップには、その誰もが期待を抱いたに違いないありません。元来メンバーの出入りの激しいフェアポートでしたが、サイモン・ニコルが戻ったこと、ドラムスがアールズ・ローランドである以外は、“エンジェル・デイルイト”と同じ編成であることには、昨今のトラッド界の隆勢と合いまって、“あのフェアポート”の

復活という観測が高まったのです。

アルバムは確かに、トラッドの分量において往時と同等でした。しかし、その質、つまりアレンジメントはあの頃のようなものではなかったのです。タイトル・チューンを10分以上に拡大した解釈に象徴されるように、そこではトラッドをいかにアトラクティブに仕上げるか? という配慮が先行している、そうぼくには聞こえました。ちなみに本会の森能文収録によるテレビのエア・チェックでは、本来のストレートなフェアポートの演奏を繰り抜けていたのです。その内の一曲、リチャード・トムアソンの“Poor Ditching Boy”はここにも収められ、その曲でのサイモン・ニコルの歌唱が、このアルバムのハイライトでしょう。しかし又、この新生フェアポートが、最近にない意欲を燃やしていることも窺えるアルバムではあります。

(松平 維秋)

BOOKS

"Folk Review"

イギリスの代表的な月刊のフォーク・マガジン。内容はレコードや本のレビュー、フォークシンガーやフォーク・グループのインタビューや紹介記事、バラッドやフォーク・ソング、フォーク・ロア関係の論文等です。フォーク・シーンのニュース等は全く扱っていません。

次回紹介する予定の、イングリッシュ・フォーク・ダンス & ソング・ソサエティー発行の季刊(といっても今は財政困難で年々回刊ですが。)のフォーク・マガジンに比べて、学術的な面はずっと少く、読みやすいと言えます。と言っても、全体的なレベルは高く、ある地方の方言に関する論文とか、バラッドに関する研究記事等、毎号かなり読みごたえのある記事が掲載されます。

レコード・レビュー等は有名なフォーク・シンガー達が、それもイングランドのレコードの場合は Tony Rose 等のイングリッシュが、スコットランドのものは Dick Gaughan 等のスコットが、又、コンテンポラリーなものには Ian, A. Anderson 等が、という風に、それぞれ地域性、音楽性から見て専門の人が担当しているの、的確でジビアナレビューがなされています。

又、このマガジンの、と言うより外国の専門雑誌の(音楽に限らず何でも。)特長として、投書欄の内容が充実しているという事があります。論文やレビュー等が、一方的な情報提供に終わらずに、その反論やより深い情報などがすぐに投書され、誌上で討論を展開するというのは、読書にと、ても非常に興味深いことであると言えます。(その点、日本の雑誌の投書欄と

いうのは、その雑誌の記事等に対する意見や反論といったものは少く、単に読者の一方的な投書が多く、非常に程度が低いと言えるのではないのでしょうか。)

時にはそのような論争が長びくこともあり、2年前の、バラッド "Hal-An-Tow" に関する論争は、一年間血を流しましたし、去年の前半に起きた、ある女性シンガーに関する Dick Gaughan と John Paddy-Brown の間で交わされた、「アートか? フォークか?」という論争などはかなり激しい内容のものでした。

この様に、このマガジンは日本にあふれている様なコマーシャルな雑誌と違い、フォーク・ソングやフォーク・ロアの研究者、そしてフォーク・シンガー達によって作られているという面が強いので、薄いながらも(大体40ページ位)非常に中身が濃く、ドラッド・ファンの方にはぜひ推薦したいフォーク・マガジンです。

年間購読料は 3.50

下記の住所あてに何年の何月号から定期購読を始めたくれ、と申し込めば毎月ちゃんと送ってくれます。もちろん船便ですから1〜2ヶ月は遅れますが。

Folk Review
Austin House,
Hospital Street,
Nantwich,
Cheshire,
ENGLAND.

(森 能文)



トラッド愛好会についての問い合わせ、及び "OAK" の内容についての、質問、反論、感想等は刊50 東京都渋谷区道玄坂 2-18-3 ブラック・ホーク内、"トラッド愛好会" あてにお寄せ下さい。